



▲戦中の学校(昭和19年)

疎開

昭和19年、都市への無差別爆撃が始まると、学校もいつ爆撃されるかわからないというわけが都市の学童は皆疎開することになった。わが偕行社学院もその例にもれず、箕面、枚岡の旅館や学校などに疎開した。一部の人は香里にも行ったようだし、家の事情で疎開できない人は大阪に留まった(これを残留組といい、以前と同じように学校にかよっていた)。私は箕面組だったが、桜井の借家から通学していた。寮は箕面駅から滝道を1キロ余り上った箕面川ぞいの二軒の薄暗い旅館だった。家から桜井まで1キロ、箕面の駅からまた1キロの上り、やっと寮に着いても「教科書のここからここまで書き取りをやってけ」といって先生は居られなくなる。書き取りが終わると薪運び、寮から更に滝道を数キロ滝の上まで登って薪を運んで来る。薪と言っても1メートルほどの丸太で、子供がやっと一本抱えられるほど重い。坂道を転がしたり、崖から下の道に落としたりしながら寮に運び込む。これが午前、午後一回ずつ。あとはまた書き取り。それから寮の前の川まで列を作ってバケツリレーよろしく水汲み。これで一日の日課が終わる。宿題など出たこともなかった。

山道を下って箕面の駅から電車で桜井に着くと、近くの公立小学校の悪ガキ共がたむろしていて何かと因縁をつける。これをごまかしたりまわり道をしたりしてくたくたになってやっと家にたどりつく。こんな毎日のおかげで足だけは丈夫になった。余談になるが、虚弱児だった私が元気になったのは疎開中の粗食と、ひたすら足を鍛えられた事によると今も思っている。

寮でのエピソード

「僕は乞食です」「僕は乞食です」

こんな妙な声が、湿りきった薄暗い廊下からせせらぎの音に混じって聞こえてきた。私のように家から通学して来る生徒を通学生、寮に寝泊りする生徒を寮生と呼んでいた。寮生は人間とは思えないような物を食べさせられ、しけた量に寝かされ、夜ごと布団に地図を描いていた。昼の時間になると、食料事情が悪いといってもまだまともな弁当を詰めてもらって来る通学生に弁当を分けてもらいにくる。それを見つけた先生が考え出したのが「僕は乞食です」であった。犯人たちを廊下の板敷ぎに座らせて大声でいわせるのだ。こんな屈辱に耐えながらも彼らは立派に生き延びた。一方、廊下の外れの一室にはどこからともなく白いご飯や肉や砂糖が持ちこまれ、宴会が行われることもあったという。

田舎ぐらし

桜井の家の前は広い畑で、夏になるとトマトがいっぱい実った。畑に忍び込んで寝転ぶと外からは見えない。夏空を眺めながらトマト食べ放題を楽しんだ。もちろんお百姓さんに見つかって逃げ出すことになる。桜井の駅に行く途中の箕面川には鮎が泳いでおり、夏の夜は何万とも知れぬ蛍が乱舞した。

中を走り抜けたとシャツの中まで蛍が入ってきた。竹やぶへタケノコを掘りに行って地主さんにとちめられ、母が謝りにいったこともあった。食べ物、とくに米がほとんどなかったので豆で増量した。配給の米を一升瓶に入れ、棒でついて糠をとるのは私の仕事だった。サツマイモの蔓を、皮をむいて炒めて食べていた。イモの蔓の皮むきを手伝うとあくで手が真っ黒になった。たまに米だけのお粥が出るのと狂喜したものである。いつのまにか虚弱児は遅くなっていた。

空襲

疎開していたので、直接の体験はない。幸運であったと言うほかない。大阪の家が焼けたのも知らなかった。父も出征して不在だった。夜大阪の空が真っ赤に染まり、



▲戦後の学校(黒い部分は爆撃の穴を埋めた跡)(校舎の汚れに注目して下さい)

雨のように焼夷弾が降るのが見えた。美しい花火を見ているようだった。探照灯の光が交差し、盛んに高射砲弾が撃たれたが敵機のほうが遙かに高く、全然当たらなかった。大空襲の時には、壹圓札の焦げたのや大事な書類の焼けたのが飛んで来て、あと決まったように黒い雨が降った。

箕面の山の中にB29が落ちたことがある。すごい音がした。友達が何処から「防弾ガラス」のかけらというのを拾ってきた。プラスチックというものをはじめて見てたいへんなショックを受けた。焼くと甘い匂いがして気分が悪くなった。こっぴどく叱られた。時々アルミ製のリボンの塊が空から降ってきた。米軍が電波の攪乱のために撒いたものらしい。キラキラ光るので、お百姓さんが田圃の周りに張って雀よけにしていた。

終戦の日

ぬけるような夏空だった。何故かいつも当たり前のように聞こえて来るB29の爆音が聞こえない妙に静かな朝であった。警報が出ていたので、朝から家にいた。

昼、ラジオで天皇陛下のお話があり、皆で聴いた。何を言っておられたのか全然わからなかったが、母に聞くと戦争に負けたいらしいということだった。やっぱりそうか、どうせこうなるだろうという感じだけで、負けて口惜しいという思いはなかった。これからどうなるのだろうかということなど頭に浮かばなかった。あの真夏の一日、そのあとどうしたか覚えていない。

戦後

帰校

疎開先から学校へ戻ったのは、正確には覚えていないが昭和20年11月頃だったと思う。大阪の家は焼けてしまったので、まだ桜井から通学していた。あとで考えてみると、疎開していたのは1年そこそこの短期間だったが、あまりにも印象が強く何年も箕面にいたように思われた。久しぶりに学校へ行って目を疑った。建物が残っている! 窓ガラスは全部割れ、壁は偽装の墨で真っ黒になり、あちこちヒビが入っていたが壊れずに残っている! なぜか兵隊さんが大勢いた。屋上に上がって見た。まわりは見渡す限り瓦礫の山、砲兵工廠がない、生駒がくっきり見える。京橋口の石垣の上の櫓もない。西の方を振り返ると偕行社も破壊されて暖炉の2本の煙突の煉瓦積みだけが寂しく残っている。大手前会館も中がすっかり焼け落ちてがらんどうだ。お城の方を見ると濠を隔てた向こうの「乾の櫓」は半分壊れ、石垣の角は崩れ落ちていた。しかし…どうして学校だけが残ったのだろうか? 嬉しかった。思わず涙が出た。それにしても学校の建物だけを残して周りを全部破壊するほどアメリカ軍の爆撃は正確だったのだろうか? それとも単なる偶然だったのか?

今となっては神のみぞ知ることだが、わが追手門にとってこれほどの幸運はなかったと思う。

だが改めてよく見るとやはり惨憺たるものであった。運動場の東南、ちょうど滑り台の前あたりに巨大なすり鉢状の穴がポッカーとあいていた。500キロ位の爆弾が落ちたらしい。もし50メートル西に落ちていたら…学校は跡形もなかっただろう。校内に入ると中は真っ暗、屋上の東北にも穴があいていて3階の教室から青空が見えた。弾は屋上を突き抜け、3階の床を焦がし、コンクリートを割って止まっていた。焼夷弾が直撃したらしい。中庭の練習機も焼けて無残な骨だけになっていた。